協調的作問機能システムを活用した看護過程の知識の定着の活用

Application of understanding knowledge on nursing process by harmonized making problem function system

辻　慶子（Keiko TSUJI）

It is important that nursing students completely understand knowledge on nursing process, because they need to apply this knowledge to a practical situation. In this presentation, the author applied WBT (Web Based Training) with harmonized study and making problem function for this purpose, and verified effectiveness of this method. But, there was difference between students and teachers in knowledge.　The author still tries to make a system for further understanding system.

はじめに

看護過程は、看護援助を行う際に複雑に絡み合った問題を、論理的に解決に導くことを支援する方法である。そのプロセスは、情報収集、アセスメント、看護問題、看護計画、実施、評価の 6 つの段階に分けられる。さらに、この 6 段階は順序よく学習していかなければ混乱するため、看護過程を初めて学ぶ学生にとっては、複雑に絡み合った問題を論理的に解決していくということは、複数の知を活用するために大変難しいことである。そこで、先行研究では、看護過程論の授業での自己学習システムを作成し、知識の理解につながるという結果を得た [1]。看護過程は、獲得した知識を実際に活用できなければ看護援助に結びつかないため、知識を定着させることが重要である。今回、知識定着型の WBT(Web-Based-Training)と学習者が作問し電子掲示板で問題を共有し解き合うことができる協調的作問システム(以後, Cisty-II)を活用したことで、知識の定着につながったので報告する。

1.　授業実践の検証

Cisty-II を用いて、A 大学看護学科の「看護過程論」の授業を行った。講義では看護過程に関する基礎的知識を修得し、知識の活用として事例展開できることを目標としている.

知識の修得と活用を積極的に行うために座学とグループ学習，作問を組み合わせた授業の展開を行った（図 1)。看護過程 6 段階の各段階のグループワークで 3 回の作問を行ったので作問数は合計 18 回となった。分析は、2 群の差の検定には対応のない t 検定､3 群の差の検定には一元配置分散分析と多重比較を行った。

図 1.　設計した授業モデル

2.　結果

1)　看護過程 6 段階の作問の有無

看護過程 6 段階おいて段階の順序性に関係なくすべての内容の作問がある場合と 1 つ以上の段階の内容の作問がない場合の比較において定期試験及びレポート点において、有意差はなかった。

2)　看護過程 6 段階の順序性の有無の比較

看護過程 6 段階各段階の 3 つの作問の作問内容が一致または 3 問中 1～2 問が一致したものを順序性がある場合と、3 問とも作問内容が一致しなかったものを順序性がない場合で比較した。定期試験とレポート点とも有意差はなかった。

表 1. 看護過程 6 段階の作問の有無

	6 段階の作問有		6 段階の作問無	
学生数	79 名		10 名	
成績の種類	定期試験	ﾚﾎﾟｰﾄ点	定期試験	ﾚﾎﾟｰﾄ点
平均点数	71.8	71.3	73.2	69.0

表 2. 6 段階の順序性の有無

	順序性がある場合		順序性がない場合	
学生数	50 名		38 名	
成績の種類	定期試験	ﾚﾎﾟｰﾄ点	定期試験	ﾚﾎﾟｰﾄ点
平均点数	72.6	71.6	71.8	70.3

3) 看護過程の 6 段階作問内容の適合性

作問の内容について、看護過程のどの知識を活用したかを学生と教員で比較した。その結果、知識の認識の一致率は平均 79%であった。看護過程 6 段階の各段階の 3 つの作問において作問内容が一致しているものが、6 段階中 4 段階以上ある場合（①）、2～3 段階の場合（②）、1～0 段階（③）の場合の定期試験とレポート点を比較した。その結果、①と③の定期試験において有意差があった（$p<0.05$）。また①と③のレポート点で有意差があった（$p<0.01$）。

表 3. 6 段階の作問内容の適合性の割合

	①4 段階以上		②2～3 段階		③0～1 段階	
学生数	16 名		36 名		37 名	
成績種類	定期試験	ﾚﾎﾟｰﾄ点	定期試験	ﾚﾎﾟｰﾄ点	定期試験	ﾚﾎﾟｰﾄ点
平均点数	76.2	75.0	71.8	70.6	69.9	69.2

3. まとめ

看護過程の授業において、獲得した知識を実際に活用するといことは、事例展開（レポート）ができることである、今回、看護過程 6 段階の各段階の 3 つの作問において、作問内容が 3 問とも一致しているものが、6 段階中 4 段階以上ある場合（①）、2～3 段階の場合（②）、1～0 段階（③）で、作問内容が一致することで、定期試験及びレポート点が高くなった。このことから知識の習得と活用ができていると考え、作問機能システムを活用することで、知識の定着が図れることが出来た。さらに知識の定着を図るために、学生と教員の間に知識の認識の差があることを解消することだと考え、知識可視化システムを作成し、授業で活用した。現在、その分析中である。

参考文献

1) 辻慶子，小松川浩：看護過程での知識理解のための e ラーニング活用，教育システム情報学会誌 31(1)，99-104，2014